

---

good luck!!

空籤

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

good luck!!

### 【Nコード】

N6377V

### 【作者名】

空籤

### 【あらすじ】

魔術などの幻想的な力を行使できる世界が存在した。しかし、そんな魔術は一体どのように発生するかは全く不明。

正確には魔力を使う、というのは分かっているのだが、それしか分かっていない。

魔力は体内に宿っており、尚且つ大気中にも存在している。故に魔力が発生している原因は分からない。

だから魔力を使う魔術も、どうして発生するのか分からない。それらを探る為、今この世界は動いていた。

魔<sup>ま</sup>検<sup>けん</sup>家と呼ばれる人々が溢れ返り、彼らをバックアップするような大規模なギルドのようなものもできた。

これは、そんな魔検家の一人である超絶運が良い若者の物語である。

- 小説を書くのは実は初めてだったりします。

## 幸運

さて運とは何だろうか。唐突な問いだが運とは巡り合わせとやらを表すのが、この突然な問いかけの答えだ。あくまでも単語の意味でしかないが。

しかし運が悪いと良いの明確な線引きはされていない。いや、まあ、普通という曖昧な線が引かれているが。ただその普通が曖昧すぎるのだ。どこからどこまでが普通の上限なのか、それは所謂個人の価値観で見るものである。

例えば勉強が出来ない人がいるとする。その人にとっては勉強が出来るといえるのは、自分の中の規格外なのだから、普通ではないと感じるだろう。人は良くも悪くも己の価値観で全てを見定める。こんなものは至極当然の事だ。

しかし、人間とは不思議なものでこの論理を認めない。自分は相手の価値観を尊重しているなどと言う、人たちも確実にいるだろう。相手の意見を取り入れていると主張する人もいるだろう。

なるほど。相手の価値観や意見を尊重する、それは良い。だがそれは自分の価値観が変わるだけであり、相手を受け入れたという訳ではない。その時だけ、相手を受け入れても、それは単なる”自分もそう思うから”というものからきているに過ぎない。

人間の心はぴったり重なり合わないようになっている。

どうやら話が逸れてしまったようだ。今は価値観云々ではなく運とは何ぞや、というものだったのに。

ともあれ普通というのがどれだけ多々の価値観によって左右されるかは、先ほどの価値観云々で分かって頂けたのではないかと思う。

つまり運の良し悪しなど、個人の価値観だということである。運が良い人は、普通の人にとってそう見えるというだけである。

- - そして、これから始まるのは、究極の運の良さを持った若者の物語である。

## 人喰い人間と臆病者

「やつべえ、超やつべえ」

とりあえず俺はそう呟いた。だってかなりピンチだから。目の前で人が人に喰われているから。しかし、相手はこちらに気付いていない。

妖しく光る金色の瞳、赤い髪はボサボサ、しかし歯はまるで狼のように尖っている。顔の形から察するにまだ10代後半だと思われる。その姿はまるつきり人間であり、その身を黒いマントで全身を覆っていた。

いやー、茂みの中で良かった良かった。もし道に出てたら、俺も喰われてたな、ありや。

周りは茂み。でかい草やらでかい木やらでかいキノコやら、まあ色々でかいのが生えているジャングルの中にいる感じ。

後一步踏み出せば、このジャングルからは離れ本来なら道へ出るという計画だった。道と言っても草木を刈り取り、土を撒いただけなのだが。まあ、でも派手じゃない馬車が1台くらい通れる広さである。

まさに数十秒前、通りました。そして俺も森から出ようとしてしまった。しかし、いきなり先ほどの馬車から悲鳴が聞こえました。

とりあえず、俺は臆病者なのですよ。だからちよっぴり様子を見ようかと。助けに行つて敵でもいたら、滅茶苦茶怖いし。

んで、茂みからでも外が辛うじて見えるような場所へ移動。そこで見た光景は、先ほど説明した外見の青年が馬車を破壊し、馬の首を素手でへし折り、何だ何だと出てきた人たちを鋭い歯で次々と噛み殺してゆく、と言ったあまりにも理解し難いものだった。

以上、回想終了。

さて、どうしましょ。

「出て来い」

俺を見てそう青年は言った。いや、正確には俺の方向をなのだが、喋りかけているということは……。目標は俺だよねってこと。

仕方ないので、出て行くことにする。どうせ殺されるのだから。

ああ、僅か18でこの世を去ることになるとは。

あんなことや、こんなことや、そんなことや、どんなこと、したかったなあ。しかし怪物と出会っては仕方がない。運がなかった……それだけだ。

俺はそう思いながら、両手を上げて降参の意を伝わるようにしながら道に出た。土を踏んだ。化け物と向き合った。

「貴様、名は？」

「これから殺す相手にそれ訊いちやう？ とりあえず君の名前教えてよ。俺を殺す名を、さ」

「……我の名はウェンディゴ。我に貴様を殺す気はない、腹は満た

されたのだから」

「うおっ！！ 予想外だ！ 俺生きれる。ラッキーだ。しかし俺の命は助かったが……まあ、その分他の命が消えたわけで。そう考えるとしたまれない気持ちになるが、悔やんでも仕方がない。犠牲になってしまった人たちは、二度と帰ってこないのだから。」

「ウエンディゴか、俺の名はレイ。レイ・アメニティ」

「レイよ、貴様は幸運だ。我に出会いながら、生きる者は少ない」

「いやいやいや、出会わない方が幸運だろ、明らかに」

俺がそう言うのと、ふっとウエンディゴが笑う。共感したのかもしれない。

「再び出会わないことを祈れ、ではな」

そう言うウエンディゴはもう目の前から消えていた。全く、人の皮を被った化け物だった。俺はへなへなとそこに座り込み、黒い皮のズボンのポケットの中を探る。

手鏡を取り出す、面の広さはポケットに入るぐらいなので、広いとは言えないだろう。その鏡で俺は自分の顔を映す。

サラサラとした金髪と女のような線の細い眉と、長い睫毛。おまけに碧眼が写し出される。そして鏡をずらすと、高い鼻とカサカサになっている口が映る。顎は無駄な脂肪はない。まるで女のような顔。別にコンプレックスではない。

「あー、やっぱり、やつれてきてるな。そろそろ街に行かないと。リュックは邪魔になったから森の中置いてきたし。新しいの買わないといけないな……だりい」

手鏡をしまいながら、そう言っただけ俺は立ち上がる。この道を通って直ぐに行けば、確かティアマトという街があった筈。

少し乱れた黒いレザーコート――まあコートと言っても薄いが一色で正す。服装は黒一色である。下の服も黒。単純に黒が好きなのです。

俺は道を歩く。そして間近で見ることになる。横倒れになった馬車、首があらぬ方へ曲がってピクリともしない茶色い毛並みの馬、服装と年層から見るに貴族の家族かなにかだろう。

顔の挟れた少女。首から下は跡形もない。ただ血が溢れているだけ。次に下半身しか残っていない、少年であろう服装の人間。他にも居たが、そこまで見て吐き気がし、目を瞑った。

弔いをしなければならぬ。少なくとも俺がやるべきだ。この身が在るのはこの人たちのお陰なのだから。

「炎よ」

俺がそう唱えると辺りに炎が発生する。魔術である。炎を発生させるのではなく、対象を燃焼する魔術。俺が目を開けた時には、馬も人も骨になっていた。俺はその骨をかき集め、抱きかかえ、道の端へと行く。

「挟れ」

森のほんの一部にクレーターを作る。そこに骨を置き、再び魔術を使う。

「土よ、この場を埋めたまえ」

クレーターが出来た際に飛んでしまった土を集め、彼らの骨を埋める。最後にレザーコートの胸ポケットから首飾りを置く。魔人除けの首飾り。赤い石と青い石の首飾りだが、この石の魔力により魔物たちと人間たちがここを荒らすことはない。何故なら魔力によってここには無意識的に近寄れないから。

森の中を通ってこれたのもコイツのお陰。しかしウェンディゴとかいう規格外には、通じなかったけどな。

しかしこれは、それなりの職人じゃないと作れない。まあ、友人から貰ったものなんですけどね。

俺は両の手を合わし祈りを捧げ、礼を述べる。

「ありがとう」

そうして俺は、再び道を歩く。折角拾ったこの命、何か役に立てなければなるまい。あ、できるかぎりという条件だけど。死にたくはないし。

空を見る。真っ暗な夜であった。

## 強い女と放浪男

かくして、俺は街に到着した。まあ、あれから魔物たちとも出会わないで来たので、思ったよりも早く着いた。それでも2、3日はかかったが。食料と水分は運良く手に入れられた。商人が街に向かう途中居たからだ。それでポケットの中に存在していた全財産で、保存食を5日分ぐらい買った。幸いに袋は商人さんがおまけしてくれた。ベージュの手提げ袋。現在それは街の門の直ぐ前にあったでかいゴミ箱に捨て、食料はコートの胸元ポケットに入れ――小さいブロック型の食料なので、ポケットの容量をあまり取らない――、水は予め腰に下げていた水筒の中に入っている。

「いやー、疲れた疲れた。てか無一文なんだよなあ……とりあえずギルドに行かないと」

お金がないと宿に泊まらない。流石にこの問題は運良く解決はしないだろう。ティアマトにあったギルドは、確かノルン……だったか。そこで魔検家として登録し、依頼をこなして、報酬をもらうのが手っ取り早いのか。

前の街のギルドで稼いだ金を全部使ってしまったのは痛いなあ。自業自得、んなこと分かってけどさ。それに首飾りもないし。

また、魔検家として働くためには依頼をこなし、ランクがAにならなければならない。Fランクから始めるのって結構億劫おっくうなんだよなあ。そもそも前のギルドのランクが引き継がないっていうのが、難点すぎるよ、畜生が。

俺はコートの内ポケットをまさぐる。そこから取り出すは5枚のギルドカード。これは俺が旅の途中に訪れた街の経歴みたいなものだ。そもそも、旅をしている事態が珍しいのだが。本来なら街の魔検家たちはその街を軸として活躍し、他の街になど渡らないものなのだ。だから放浪生活をしている俺はこの世界じゃ珍種。希少種だ。

わざわざギルドカードを作り、ランクをAにする必要があるのは、やはりAになった場合に魔検家という職業ができるからだ。魔検家、魔力を探る人々のこと。つまり俺はそれに値するのだろう。だが俺はそんな職のことなんざ知ったこっちゃない。

ランクAになった場合、魔検家をサポートするためにギルドがこれまでの魔力や魔術に関する情報を開示してくれる。その情報を知りたいがために俺は面倒なのを承知して、ランクAまでランクアップしなければならぬ。情報は世界共通。だから普通なら一つの街に留まる、ということなのだが、俺は放浪の身の上、更新された情報を確かめるにはコレしか方法がないのだ。

世の中ってキツイよね。俺はただ世界を見て歩きたいだけなのに。まあ俺にとって魔力や魔術にも同等の価値があるから、この生き方を止める気はない。

……いや、まあ、七面倒なのは嫌だが。

俺は5枚のカードを眺め、そんなことを考え、再びポケットにしまい込んだら、その思考を止めた。

「それにしても、ギルドはどこだろう」

……地図はない。道案内の看板もない。現在俺は街の入り口の、少々古びてしまっている門に寄りかかっている。さて、どうしまし  
ようかね。

ま、適当に歩くか。そのうち着くだろう。幸い今はまだ早朝。太陽がちょっぴり顔を出しているくらいだ。運良く行けば朝には、運が悪くもおやつの時間には着く筈。

俺はギルドノルンを目指し歩き始めた。

「えっ、もしかして俺修羅場？」

適当に歩いていたら女の子が襲われそうになっていたので、関わるの面倒だなあ、と思ってその場を去ろうという外道な行動をしようとしたんだよ。だって相手は三人でナイフ、メリケンサック、指輪だよ？ ナイフは刺されたらやべーし、メリケンは殴られたら顔潰れるし、指輪に至っては魔力備わってるかもしれないんだよ？  
とてもじゃないが無理。

とまあ、臆病な俺はその場から立ち去ってしまおうという結論。  
だが俺の見立てはどうやら間違えていたようで、助けるべきは女

の子ではなく、ガラの悪い連中だったらしい。いや、だって女の子があつという間に倒してしまったから。

んで、まあ一味と勘違いされ、今日の前で剣――どうやら、片手剣らしい――を持って俺に近づいてくる彼女。

うん、状況を整理したけど、まったくもって不運でしかない。だが現実はんなことを嘆いても変わらない。変わるとしたら、それは現実逃避だ。確実に。

彼女の容姿は可愛い、ではなく美しいという類だった。少なくとも俺の目にはそう映った。

黒いロングヘアーの背中中まであるであろう髪形は、清楚さを漂わせ、目はちょっと吊り目だがそれも彼女の魅力と言われれば納得できてしまう。覗いたら、闇に魅されてしまうかのようなどこまでも黒い瞳。長い睫。服装は割と軽装。左肩から胸までのプレート、右腕は剣が振りやすいようにあえて装備していないのだろう。見える肌は白い。そして赤いスカート。何故スカート。まったく防御力の無いスカートを何故。

「貴様も、私を狙っているのだろうか？ 悪いが、倒させてもらう」

小さい口が開き、そこからは凜と張った低音の声が発生した。そしてスラリと伸びた足はレンガで作られている地面を強く蹴り、真っ直ぐ俺の方へ向かってくる。

ヤバイ。ヤバイヤバイ。どうする？ 言い訳、つつーか真実を伝えられる雰囲気じゃねえ！！ てか暇がねえ！！

心の中で喚く。しかしやはり現実是不変。

「ちくしょ」

俺はそう言っただけ。

「ほう、中々良い構えだ。どうやらさっきの奴らとは格が違うよ  
うだ」

「いやー、それほど」

「ふつ、余裕だな！」

声と共に剣が俺の体を斬る為に横一線に振られる。俺はその後方に跳んで、それを避ける。

「逃がすかつ」

彼女は前に跳んで剣を突き出してくる。俺はいと不敵に笑ってみる。確か友人は言っていた。

・・・ピンチの時は笑え。

笑って、どうすんだ、こんちくしょーが。

「終わりだ」

「ちつ、” 挟れ”」

俺がそう言っていると衝撃波が飛ぶ。それを咄嗟の判断で彼女は剣を盾として活用し、受け止めた。しかし彼女は少し吹っ飛ぶ。俺と女の距離は少し開く。

「……今のは魔術か？」

「まあね」

彼女は怪訝そうな顔をする。やはり俺の魔術の詠唱方法はかなり異様なものらしい。

「言葉を発するだけで魔術になる筈ないだろう！魔術とはこういうものだ」

そう言っただけで彼女は左腕をこちらに向ける。一般的な魔術をする挙動。俺の言葉だけの魔術とは違う。

「彼<sup>か</sup>の物を焦<sup>アケ</sup>がせ、” 火”」

彼女が唱え終わると俺に火の玉が向かってくる。俺はそれを顔を横にスラすだけかわす。

「これが魔術というものだ。詠唱の長さで威力が決まり、魔術名を唱えて、初めて魔術を発生させる事ができる。だが、貴様は違うようだ。一体どんな手品だ？」

「俺には一般的な魔術は使えない。代わりに俺独自の魔術なら使える。ってことさ。お分かり？」

「……貴様の存在に興味が湧いた。名はなんという？」

最近名前訊ねる人多いなあ。あ、まあ前はバケモンだったけど。ウェンディゴ。二度と会いたくない。

「相手に名乗らせる時は、自分からだ。そして俺には戦う意志はないので、剣を収めてくれ、怖いから」

彼女は暫し真剣な顔で俺を見て悩んだが、信じてくれたようで剣を腰の鞘に収めた。ふう、助かった。いきなり剣で斬られそうになった時は、ほんとに怖かった。

「そうだな。私の名はラピス・カシナートだ。改めて訊こう、貴様の名は？」

「自己紹介ありがとう。俺の名前はレイ・アメニティ。因みに君を襲った一派ではないんだよね。たまたまここを通りかかったんだよ」

そんな俺の言葉に彼女は驚いた表情をする。何か変な事でも言っただろうか。

「こんな早朝に、街の裏側の奴らが統治しているところに偶然？  
ハハッ、凄いな。それが本当ならば」

「本当だつて！ まだこの街に来て間もないんだよ。つかたまーに  
すれ違う人たちやけにみんな強そうだなんて思ってたけど、つまり  
そーゆー事かい。くそつたれ」

俺は愚痴を零す。しかも周りを見てみれば、ここは完璧な路地裏。  
コンクリートとレンガの壁が俺をサンドしている。ああ、しまった。  
やはり行き当たりばったりに街を探索してはならない。確か前の街  
でも同じような事が起こった気がする。うん、全く前回の教訓が活  
きてない。

「そのガツクリ感はどうやら本当のようだ。……まあ、私もこの  
住人ではない。私はギルドから依頼を受け、此処にいる」

「ギルド！？」

「あ、ああ。どうしたんだ、レイ？」

俺はツいているのかもしれない。何はともあれギルドの場所を知  
っている人に会うことができたのだから。

## ギルドと受付嬢（前書き）

誤字・脱字をかましくってる。見つけ次第直してますが、気付かないところもあるので、見つけたら連絡下さい。

## ギルドと受付嬢

「いやー、ラッキーだよ。カシナートさんがいてくれて。それにしても良く俺を襲った連中の一人ではないと信じてくれたね」

「カシナートさんはよしてくれ、ラピスで良い。単純なことだ、貴様からは殺気がない」

殺気、ね。それを感じることができるということは、容易なものではない。きっと彼女はAランクの魔検家、もしくはそれぐらいの実力の持ち主ということになる。おー、怖い。そんな人に俺は剣を突き付けられた、命があるって素晴らしい。

「ここだ」

「ここ？」

俺は目の前を見える。そこにはでかい洋館めいた建造物があった。広さはかなりある。普通の一軒家が三軒くらい立つんじゃねえか？ まあそんなのはどうでもいい。ギルドはそれなりに儲かっているは筈だから、これぐらいの建物は普通だ。

ギルドの前の看板にはノルンとデカく書かれていた。周りには色鮮やかな花々が付いている。これは確実にノルンのギルドの独断であろう。それにしても、女が好みそうな看板だ。一瞬カフエかなにかに来たのか目を疑う。こすつても花々は消えないのでこれが幻

覚ではないと悟り、若干肩を落とす。今までのギルドの硬派な感じが好きだった俺は、この感じになれないためだ。

「なあ、これ」

「ああ、このギルドマスターは女なのだ」

驚いた。ギルドマスターに女がいたとは。ギルドマスターとは世界で有数の実力者だ。今まで出会ったのはゴツイ男たちだった。

「因みに可愛い」

何故かムスツとした表情でラピスがそう言った。可愛いギルドマスターか……凄いな。早く見てみてえ。

「ほら、行くぞ。手続きするんだろう？」

「ん、そだね。いきなり派手な雰囲気だから氣い抜けた」

「ははっ、多分そういう意図もあるんだと思う」

そんな会話をしながらギルドのドアを開ける。ドアは両開きの扉だ。

中は暖かみのあるオレンジ色の明かりが点いている。広さは普通のリビングの十倍ぐらいか？ テーブルとイスが配置されており、ここが酒場になったりもする。俺は未成年だから飲まないさ。きつと。レンガの壁はざらざらしていそうだ、当たり前。

「受付はあっちだ。ちょうど私も依頼をこなしてきた後だ、一緒に行く」

「やー、こんな美人に誘われるなんて、ラッキーだぜ」

「世辞は良い。だがありがとう、と言っておこう。 お前もワイルドだ」

「野性的って誉められてねえよなあ」

ああ言えばこう言う、という性格らしいなラピスは。俺とは違う方向でひねくれ者だ。そんな事を考えながらラピスの後をついてゆく。朝でも人は結構いる。まあ、半分は酔いつぶれてるけどねー。

「ラピスじゃない。依頼終わったの？」

どうやらいつの間にか受付のカウンターに着いていたらしい。ラピスが受付のお嬢さんに話しかけられている。

「ああ、終わったよ。全く、盗賊を捕らえるために”裏のところ”まで行ってしまったよ」

「えっ！？ 怪我とかは……無意味な心配みたいね」

「こらこら、心配してくれ」

双方と同じタイミングで肩を竦める。完全に俺は蚊帳の外である。止めてー、俺の影薄くしないでー。とラピスの背中からひよいと顔を出してみる。

「あら、ラピスが誰かを連れてるなんて珍しいじゃない。しかも男」

ニヤニヤと嫌らしい笑みを受付嬢が浮かべる。俺もとりあえずニッコリ愛想笑いをする。そんな光景にはあ、と溜め息を吐くラピス。ごめんなさい、お調子者で。でも後悔はしない。

「で、誰なのその子？」

「迷子だったので連れてきた。ギルドが目的地だと言うから、ガイドしてやった」

「どーもー、ガイドされたレイ・アメニティです」

俺は適当にヘラヘラっと笑いながら自己紹介をする。緊張したくないんさ。

「という訳だ。私はギルドマスターに会ってくる。後は任せた」

「了解」

そう受付嬢に告げ、黒い髪を靡<sup>なび</sup>かせながら、ラピスは何処かに向かつていった。とりあえず心の中で、あざーすと感謝しとく。

「さて、自己紹介が遅れたわね。私はこのギルドの受付を担当してもらってる一人で、名前はカナリア・キャリバー。宜しくね」

ニツコリスマイルである。有無、誠に素晴らしい営業スマイル。

赤いベレー帽よりも一回り小さい帽子をちょこんと頭に被り、サラサラとした肩まである銀髪、ラピスよりも少し頬に肉があるが、逆にそれが可愛い。金色の瞳はまるで宝のように輝きいている。制服の赤い蝶ネクタイをどんと押し出している胸は綺麗な彎曲<sup>わんきょく</sup>になっている。

上半身までしか見えないが、この人は確実に美少女である。赤いブレザーのような制服姿も似合っている。

「改めて宜しくー、キャリバーさん」

「カナでいいわよ。みんなそう呼んでるし」

「カナさん」

「んー、まあいいか。宜しくね、レイ。で、ギルドに来た用件は？」

いきなり呼び捨てかい。とツツコミそうになるのをぐつと堪える。

「ギルドメンバーへの登録」

「分かったわ、じゃあちよつと待ってて」

そう言つてカナさんは奥に行く。これまでの経験からしてギルドカードを取りに行ったのだらう。案の定左手に長方形の一枚のカード、右手にペンを持ちながら、受付カウンターに現れる。

「レイ・アメニティ……と。あ、年齢は幾つ？」

「18」

「ん、完了。どうぞ。だけど最初はFランクからよ、依頼の数をそれなりにこなせばランクアップしていつて、受けれる依頼も幅広くなるわ」

全く聞く気が起こらない、カナさんに失礼だろ、俺。  
でも流石に同じ説明をされたんじゃつまらない。向こうは初心者  
だと思ってるんだろうけどさー。

「このギルドカードの機能は、登録した相手と通信ができることよ。  
あとAランクになれば魔検家になれるわ」

……そろそろ眠い。はっ、いやいや、起きてる、起きてるぞー。  
かなりヤバいけど。

「ま、今はこれぐらいかしらね。分からないところがあつたら聞いて  
くれれば答えるわ」

「いや、ないよ。早速依頼を受けて構わないよね？」  
「ああ、どうぞー。一番最初だし簡単なのにする？」

簡単な依頼だと報酬もそれなりにしか貰えない。多分宿代までは  
到底足りないだろうなあ。ここは難しい依頼をこなすしかない。ま  
あFランクの依頼ならば、簡単なのしかないだろうけど。

「Fランクで一番難しいのを頼みたい」

「え、でもオーガの討伐よ？ FランクだけどEランクの依頼にも

あるようなモンスターを討伐するのは、危険よ」

カナさんはこちらを呆れた顔で見ている。身の程を知れ、ということ遠回しに言ってくれているのだろう。初心者ではない俺にとって心配なんて不要である。

他のギルドカードを見せて、納得させるのも有効だが、ランクAともなると、色々と目立ってしまう。目立つのが嫌いな俺は、こうして隠すしかねー。

「オーガ討伐で構わない」

「構わないって……はあ、死んでも知らないわよ」

「構わない」

俺がはつきりと言うとカナさんは漸く説得を諦めてくれたらしく、カウンターに設置されている端末をタッチしたりしてゆく。

ピコンと俺のギルドカードから音になる。見てみるとクエストの欄にオーガ討伐と記されていた。

「はい、依頼の受諾完了。ティアマトの東にある森にいるオーガを倒し、倒したら持ち帰ること」

持ち帰るといふのは普通に考えたら不可能だ。オーガでかいし。しかし、便利な袋がある。縮小の袋と呼ばれている。その名の通り縮小の魔法がかかっており、オーガでも楽々入る。しかし上限があり、上限に達すると白い袋が赤い袋に変わるといふ便利な品物。

俺の腰にもぶら下がっている。中身は空っぽだけどき。

「了解、んじゃ、行きますか」

「死なないようにね」

「しつこいなあ、なんなら賭けでもしますか？」

カナさんは暫く顎に手を当てて考える仕草をする。そしてニヤリと少しばかりいじらしい笑みを浮かべる。

「そうね、夕方までにオーガを倒せたらレイの勝ち、倒せなかったら君の負け。あなたが勝ったら、デートしてあげるわ」

「うおおっ！！ うし、頑張ってください」

予想外なイベント発生に思わず叫ぶ俺。そんな俺をカナさんはクスリと笑う。さて、オーガなんて瞬殺してくるぜ！

そう意気込んだ俺はギルドから出た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6377v/>

---

good luck!!

2011年10月9日13時02分発行